

われらが父祖の地として指摘されている“照葉樹林帯”の一角なのだが、山道の奥深くや峠越えの折にその片鱗が偲ばれる程度で、西南日本と同じくそのほとんどは二次林化してしまっている。その村里近くの部分が多く松の疎林となっていて、近年、日本へ輸出されるマツタケの産地として脚光をあびている。しかし、その管理のよさは、マツタケ取人を目指しての打算的な努力というよりは、従来からの燃料用の山林としての用途に対してのものようだ。初冬という時期にあたっていたためだろうが、落葉した松葉をかき集めて大きく束ね、天秤棒で背負って山から降りてくる農民の姿、そして民家の傍らにそれが山と積まれている情景にしばしば接したものだ。

ちなみに、マツタケの現地値段は、干しあげた極上物で100グラム当り30円（日本円で1,300円ほど）であった。生で約1斤（500グラム）にあたる量である。

ともかく、このような耕地や山林の生産力維持ないし増進に対する農民の姿勢が、最近の生産請負制によって助長されているのであれば、それも大いに結構なことなのだが、それ以上に、長い歴史のなかで積みあ

げられてきた、典型的な農耕民族としての中国の民衆——漢民族ばかりでなく当地に多い少数民族を含めて——の土地に対する愛情、それから生み出されて農の文化の強靱さをみせつけられる感であった。

それにしても5年ぶりに訪れた昆明東部の撒尼族の地、カルスト地形観光地として知られた石林のあまりの変貌ぶりには目を覆うものがあった。執拗につきまとうみやげ売りのおばさんや娘さんのカタコトの日本語からして、それがもっぱら、狂乱地価に弄ばれ、農の文化を忘れ去ってしまったわが同胞のなせる業ということは想像に難くないのだが、まさにこれでは“観光公害”である。経済大國日本の公害輸出の一形態というべきもので、これがひいては地元の階層分化・地域分化を助長させ、さらに経済・文化の破綻に結びつくこと必定と思われる。中国側の開放政策にしても、末端管理が不十分であることを痛感して帰国したのだったが、はからずもその直後、“自由化の行き過ぎ”に対する引き締めの政策が、またまた中国を大きく揺るがすことになったのである。

（明治大学）

国際化時代の病気

太田 勇

国際化の必要が強調され出したのはいつ頃だったろう。近年それを聞く頻度が高くなった。日本企業の海外進出はますます盛んになり、円高に助けられて海外旅行者は増え続ける。国外へ出る日本人の数は1年に500万に達したという。かつては夢物語だった外国での生活がいまは身近になった。小学生でさえ親もとを離れて留学する時代だ。海外へ出ること、外国人と接することは、もはや限られた人々の特権でもなければ、異例の体験でもない。すべての日本人が国際的になったかに見える。

ところが不思議なことに、「国際都市」東京においてすら、外国人はいぜんガイジンの扱いを受けている。電車のなか、街角はいうに及ばず、往々にして外国人旅行者の多い大ホテルでも、ガイジンすなわち白人は、いつもじろじろ眺められる存在だ。白人はみな英語をしゃべると信じる子供たちは、ガイジンを見るとハローと呼びかける。

日本社会では外国へ行った経験は相変わらず自慢の

種となり、長く日本を離れていればいるだけ偉くなる。驚いたのは、海外の出張・勤務が当たり前の会社、職業でもそれがあることだ。長い外国生活で日本の情報にうとくなり、日本語が下手になったと得意気に語る人さえいる。外国住いそのものが自慢になるのは、もちろん、それを羨み感心する人口が大きいからだ。外国で何をしていたかは大して重要ではない。大切なのはどこの国に、どのくらい長くいたかだ。韓国よりはオーストラリアがよく、オーストラリアよりはフランスが優る。カナダの2年はスイスの2年と同じかもしれないが、台湾の10年はアメリカの3年に及ばない。これを偏見・差別と言わずに何と言おう。

『週刊文春』1月22日号にこんな記事があった。山形県朝日町の農家の「嫁さがし」についての関係者の談話：うちも本当はアメリカとかフランスとか先進国から嫁をもらいたいんですけど、そこまでいくにはうちの町の男性ももっと勉強しなきゃならないし……日本へ行ってもいいというのは今のところフィリピン以外

ないんじゃないかな……。あの中曽根発言が問題になってからいくらも間がないのに、こういう記事を平気で載せる雑誌がある。日本はアメリカでの非難を知ってから中曽根発言を話題にする国なので、これにいまさら驚く方がおかしいのかもしれない。欧米に対する抜きがたい劣等感、その裏返しであるアジアに対する優越感は、とことんまで我々の体に浸みこんでいるらしい。

同様な話をもう一つ。ある小さな研究会での発言だ。「みんなが国際化というのが、国際化はいいことばかりではない。アメリカから学者が来るだけでなく、フィリピンから拘模が来ることにもなる。」私は啞然としたが、他の同席者は何も感じなかったようだ。悪い例を何のためらいもなくフィリピンに求めることへの私の疑問は、どうやら一同にとって意外だったらしい。

今日、我々が得ている情報は膨大だが、既成観念ないし先入観を修正する働きがあるとは限らない。むしろ、

ステレオタイプ・イメージの補強を行ってはいほしないか。情報の受取人は必ずしも新しい学習のために情報を活用しない。海外へ出かける人が増え直接さまざまな見聞をしても、既存知識いかんによっては、かえって事実を歪めた理解がひろがるおそれがある。歴史の教師に比べ地理の教師は仕事がやりにくい。「私ははっきり見て来ました」、「私は自分で経験しました」と言い張る生徒には、その土地へ行ってない教師が書物を通じての正しい知識を伝えても、公平な判断を教えても、説得力がないのだ。「私は東京に30年住んでいるが、東京について知らないことの方が多い。君はパリにたった5年いただけで全ヨーロッパを知っていると言う。どうしてだ」とたずねてみても、相手にはわからない場合が多いだろう。こと外国がからむと、我々日本人は病気になる。

(東洋大学)

「頭の中の地図」ということ

中村和郎

Peter Gouldが著わした“Mental Map”という本が日本では「頭の中の地図」という表題で出ている。Peter Gouldといえ、いわゆるnew geographersの一人として豊かな着想を次々に発表したことで知られている。上記の本の中では、「どこに住みたいか」という主観的なことを定量的に扱う道を開いた。環境と人間の関係をゲーム理論で説明しようと試みた数少ない地理学者でもある。地理教育についても斬新的な意見を発表していて、その活動領域は非常に幅広い。

嗜好や価値観の問題は、ここ数十年来地理学の新分野で盛んになってきたperception研究の一つである。perception研究は、人によってさまざまにまとめられているが、このほか、Kevin Lynchの「都市のイメージ」だとか、Gilbert White School(こういう呼び方があるかどうか知らないが)の自然災害だとか、Thomas F. Saarinen(かれもGilbert White Schoolの一人)が現在精神的にすすめている「手書き地図」だとかがあって、そのテーマは多方面にわたっている。

さて、「頭の中の地図」というのは、地理学にとってたいへんおもしろい問題ではないかと思う。

よく引きあいだにされるように、ニューヨークっ子

の頭の中に描かれた合衆国の地図は、北東部が肥大していて南部はやせ細っているとか、黒人の地図は白人の居住地区が空白で説明しようあるとか、ともかく、これまで教科書や地図学で教わってきた「正確な地図」とは似ても似つかぬものである。主観的といってしまうればそれまでだが、Lynchの「都市のイメージ」は、そんな頭の中の地図にも構造があると教えてくれた。たしかに、われわれの頭の中にある東京の地図は、地図帳にある通りの正確な地図ではなくて、東京タワーや新宿副都心のようなランドマークや、主要な交通路網などからなる、ずいぶんと不完全なものである。クラスで、知っている都市の地図を書かせてみると、なかに1人ぐらい左右を反対に書く人がいるらしいことも不思議である。ふだん地図を持っていない人のほうが圧倒的に多いということを考えてみれば、人々の日常の空間的行動はこんな不完全な地図をたよりにして行なわれているのかと驚かされる。

しかし、いつも住んでいる都市については、まがりなりにも、構造化された、まとまった地図をわれわれは頭の中に持っているといえそうである。それならば、国について地図を描いたらどうだろうか。Saarinenのよう